

# 活動としてのテオーリアー

## —アリストテレスからキケロへ—

近藤 智彦

ゼノンが言うところによると、クラテスが靴屋の中に座ってアリストテレスの『プロトレプティコス』を読み上げていたのだが——キュプロスの王テミソンに宛てて書かれたこの著作の中では、哲学することに対して [テミソン王以上に] よい条件が多く備わっている人はいない、と言われていた。なぜなら、[テミソン王は] そうしたよい条件のために費やすことのできる富を誰よりも多くもっており、さらに名声も具えているのだから、と。——このように読み上げられるのを靴屋も靴を縫いながら聞いていたところ、クラテスは次のように言ったという。「ピリスコスよ、私は君に対してプロトレプティコス（哲学のすすめ）を書く方がよさそうだ。なぜなら私の見るところ、アリストテレスがこの著作を書いた宛先の人物 [テミソン王] よりも、君の方がよほど哲学することに対する条件を備えているのだから」と。（Stob. 4.786.1–10 Hense = Teles Cynicus fr. 4B Hense = SVF I.273）

### 1. 自由人の営み

ギリシア哲学研究者ならば誰でも、哲学の意義といった話題をめぐって他分野の哲学研究者と議論するうちに、古代哲学——特にその研究——は相手方の念頭にある「哲学」には含まれていないこと、それどころか「本当の哲学」を阻害するものとすらみなされていることが判明して、愕然とした経験が一度はあるのではないだろうか。こうした問題そのものの検討は本セミナーのシンポジウム「いまなぜギリシャ哲学か」に任せるとして、今はどうしてこのような事態が起こるのかを考えるならば、それは「哲学」という名でいかなる営みを指すのかが往々にして一致しないことによると思われる。とはいえ、「哲学（*φιλοσοφία*）」という概念がそもそも、納富信留が論じているようにソフィストの「非哲学」との対決の中で確立されたものだったのならば [納富 2015 (2006)]、「本当の哲学」とはいかなる営みかということ自体が絶えざる論争的となることは哲学の宿命と**言うべきかもしれない。**

だとすれば、古代において「プロトレプティコス（哲学のすすめ）」と呼ばれたジャンルの諸著作も、「哲学」とはいかなる営みかという問いをめぐる考察を、表立ってではないにせよ含まざるをえなかったはずである。「哲学」という概念自体について必ずしも共通理解が成立していない以上、いくら「哲学すべきである（*φιλοσοφητέον, philosophandum*

est) 」と繰り返したところで、その概念に一定の内実を与えない限り、単なる空疎な言葉になりかねないからである。少なくともアリストテレス初期の『プロトレプティコス』 [以下、廣川 2011 を文脈に合わせて一部改変] がそのような著作だったことはよく知られている。アリストテレスが対決したのは、イソクラテスの哲学観であった [廣川 2005 (1984), Hutchinson & Johnson 2010]。イソクラテス晩年の作『アンティドシス』 [小池 2002 を一部改変] の有名な箇所を引くならば、彼は「言論と行為のいずれに対してもその場ですぐに何の役にも立たないものを『哲学』と呼ぶべきではない」 (266) と述べ、アカデメイアで学ばれていた数学的諸学問などを排除した上で、「憶断によってたいていの場合に最善を狙い当てることのできる者を『知者』と認め、そのような知 (φρόνησις) が最もすみやかに獲得される学業に励む人々を『哲学者』とみなす」 (271) と論じていた。こうした「実用的」哲学観に対して、アリストテレスはあえて「観想知 (ἡ θεωρητικὴ φρόνησις)」 (後の倫理学書とは異なり『プロトレプティコス』での φρόνησις は実践知の意味に限定されない) の自体的価値を擁護する。「すべてのものから、そのもの自体とは別の益を求めて、『それはわれわれにとって何の得があるのか』とか『それは何の役に立つのか』などと問うことはまったくおかしいことである」 (Iamb. Protr. IX, 52.25–28 Pistelli [以下 ‘Iamb. Protr.’ を省略]) と述べる一節などは、当時としても挑発的な哲学観の擁護だったはずである。

とはいえ、アリストテレス的な哲学観もまた批判を受けることを免れなかった。その一端を示すのが、冒頭に引いたキュニコス派・ストア派に由来する資料である。王のための哲学と靴屋のための哲学とを対比させるこの逸話から透けて見えるのは、一種の「選良主義的」哲学観に対する反発だろう [Fuentes González 1998, 438–9, Van der Meeren 2010, 85–8]。観想知ないし哲学が自体的価値——それどころか「われわれが存在しているのは一種の知をはたらかせ学ぶことのため (ἔνεκα τοῦ φρονῆσαι τι καὶ μαθεῖν) であるということとは明らかだ」 (IX, 52.5) と言われるように、人間にとって至高の価値——をもつとすると、人間が行う他の営みはすべてその「下働き」としての価値しかもたないということにでもなるのか。アリストテレスの両倫理学書における (さらには『政治学』も加えての) この点に関する立場は、周知のように単純な解釈を許さない。だが少なくとも弟子テオプラストスは、「知恵 (σοφία)」と「思慮 (φρόνησις)」 (ここでは観想知と実践知の意味) の関係を「主人」と「(奴隷身分の) 家令・執事」の関係に擬え、「奴隷が家の中で為されるべきことをすべて行為するのは、主人が自由な営みのために閑暇 (σχολή) を過ごせるようにするためであり、また、思慮が行為すべきことを命じるのは、知恵が最も尊いものの観想のために閑暇を過ごせるようにするためである」 (Σ Arist. EN 1145a10–11 = Thphr. 461 FHS&G) と論じたとされる [Fortenbaugh 2011, 339–45]<sup>1</sup>。アリストテレス自

<sup>1</sup> テオプラストスの影響下にあると考えられる偽アリストテレス『大道徳学』 [新島 2016] 1198b12–20 にも同様の議論が見られる [Inwood 2014, 26–7] (cf. Arist. EN 1145a6–11, EE 1048a21–49b23)。

身も『プロトレプティコス』では、「思惟し観想すること ( $\tau\acute{o}$   $\delta\iota\alpha\nu\omicron\epsilon\iota\sigma\theta\alpha\iota$   $\kappa\alpha\iota$   $\theta\epsilon\omega\rho\epsilon\acute{\iota}\nu$ )」を「今もわれわれは自由な生と呼ぶ」(IX, 53.6–7; cf. VI.40.6–11)と記しており、また『形而上学』A巻にも、哲学の希求する「知 ( $\phi\rho\acute{o}\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ )」(『プロトレプティコス』的な用法!)について「他の人のためにではなく自分のために生きている人間を自由人と言うように、これを諸知識の中で唯一の自由なものとしてわれわれは求める」(982b24–27)と論じている注目すべき一節がある。だからこそ、哲学の誕生には「有閑階級」の誕生が不可欠だったとされたのであった(981b13–25; cf. Iamb. *De Communi Mathematica Scientia* xxiii, 70.16–71.4)。

自由人の営みとしての哲学——アリストテレスが『プロトレプティコス』で強調したこうした側面こそ、キュニコス派・ストア派が嚙みついた点だったと思われる。ただし、キュニコス派もストア派も、哲学と自由の関係をあらゆる意味で切り離れたわけではない。彼らが批判したのは、閑暇の内に行われる観想として「自由人の営み」を捉える発想であった。この点に関連してストア派の自由概念についてはいくらか論じたことがあるので [Kondo forthcoming]、本稿では「観想 ( $\theta\epsilon\omega\rho\acute{\iota}\alpha$ )」の方に注目する。特に、アリストテレス『プロトレプティコス』に見られた観想の理想化とそれに伴う問題が、「プロトレプティコス」というジャンルの歴史にとって重要な作品を書いた二人の間で——すなわち『プロトレプティコス』のアリストテレスから『ホルテンシウス』のキケロへと——どのように受け継がれたのか、その流れを辿ってみることを試みたい。とはいえ、その全容を扱うことは到底できないから、以下で行うのは、二人をつなぐ最も重要な仲介者と考えられるアスカロンのアンティオコスという哲学者に焦点を当てた限定的な考察になる。アンティオコスはキケロの師の一人であり、アカデメイア派が懐疑主義に転じる以前のドグマティックな「古アカデメイア」への回帰を主張したことで知られる。彼は古アカデメイアとペリパトス派間の実質的な一致を主張しており、特に倫理学についてはアリストテレスをはじめとするペリパトス派に大きく依拠している。それに加えて、ストア派と対立するのも言葉上のみであって実質的には同じ立場をとっていると説いて、(近年は避けられる語をあえて用いれば)「折衷的」とも言える立場を模索したのである (Cic. *Acad.* 2.15 etc.)。アリストテレスとストア派が鋭く対立しているはずの観想の問題について、アンティオコスはどのように舵を切り、キケロに引き渡したのだろうか。

## 2. 至福者の島

ところで、上で確認したような「選良主義的」とも見えるアリストテレスの哲学観に対する批判が、藤澤令夫による『プロトレプティコス』に関する優れた研究に見出される [藤澤 2000 (1973)]。藤澤は、本著作をまだプラトンの段階にあるとみなしたイェーガーとは逆に、そこにプラトンからの離反の始まりを見ている。それは、観想と実践とを

区別した上で、その各々に関わる知を峻別するという点においてである。すなわち、藤澤のまとめに従うならば、「(I) 「〈自然〉 〈真理〉 についての知識」 = 哲学 = 観想知 = “善き” 知識」と「(II) 「〈正〉 〈利〉 または 〈徳〉 についての知識」 = 立法・政治 = 実践知 = (人間の生との関連における) “有益な” 知識」という二系列の区別である〔藤澤 2000 (1973), 238〕。ここから藤澤は、次のような彼らしい「アリストテレス墮落史観」を引き出す。別の論文から引くと、「アリストテレスがピュタゴラスやアナクサゴラスを範とする学究的理想に駆られて、『実践』(行為・製作)に対する『観想』の優位を強調するあまり、ついには、人間が望見しうる(また希求すべき)最高の神的な生き方においては『実践』そのものが意味を失って消滅すると想定するまでに、『観想』の(最終レベルにおける)『実践』からの絶縁性を正式見解としたことは、やはり——倫理学・政治学における彼のすぐれた業績にもかかわらず——それ自体としては無理な、あるいは自然本来のあり方に反した(*παρὰ φύσιν*)見解であったといわなければならないだろう」〔藤澤 2000 (1985), 71-2〕と藤澤は断じるのである。

アリストテレス『プロトレプティコス』の特徴的な議論として藤澤が注目するのは、「至福者の島」の思考実験である。それによると、「至福者の島」にわれわれが連れて行かれたならば、「そこでは、何かのために役立つというようなことはまったくなく、また何かは他の何かに利益となるようなこともまったくなく、ただ思惟と観想だけが残る」

(IX, 53.2-7)と語られる。この一節は一般に、キケロ『ホルテンシウス』〔以下、廣川 訳 2016 を一部改変〕の次の資料と関係づけて読まれてきた〔藤澤 2000 (1973), 240, Hutchinson & Johnson comm. ad. loc.〕。「もしわれわれがこの世から移住することになったときに、伝説にあるように、至福者の島で不死の生を送ることが許されるとすれば、そこにはいかなる裁判沙汰も生じえないのであるから、雄弁に何の必要があろうか、あるいはさらに諸々の徳そのものさえ何の必要があろうか。すなわちそこでは、いかなる苦難も危険も提示されることはないのだから (*nullo proposito aut labore aut periculo*)、勇気の必要もなく、また欲しさのあまり手が伸びるようないかなる他人の財産もないのだから、正義の必要もなく、さらにまた、そこにはもはや存在しない欲望を制御すべきいかなる節制の必要もないだろう。思慮 (*prudentia*) さえ、善と悪の選択が提示されることはないのだから (*nullo delectu proposito bonorum et malorum*)、必要としないだろう。したがって、そこではわれわれは、ただ一つのもの、すなわち自然の認識と知識 (*cognitio et scientia*) ——これはただそのもののゆえに、神々の生さえ讃えられるべきものである——によって幸福なものとなる。」 (August. *Trin.* 14.9.12 = Cic. *Hort.* fr. 50 Müller = 110 Grilli)

この『ホルテンシウス』の資料で注目すべき点は、実践に関わる諸徳が「至福者の島」では不要になるという極端な主張である。とはいえ、アリストテレスも『ニコマコス倫理学』10巻で、至福の神々には正しい行為、勇気ある行為、気前のよい行為、節制ある行為などは無縁であり、ただ観想だけが残されるという議論を展開している (1178b7-18)。異論はあるものの〔牛田 1991 第6章 III; cf. *Pol.* 1334a22-40〕、近年も Hutchinson &

Johnson があらためて論じているように『ニコマコス倫理学』10巻が『プロトレプティコス』の影を色濃く残しているとするならば [Hutchinson & Johnson 2014, 406–7]、『プロトレプティコス』の「至福者の島」の議論に「『観想』の（最終レベルにおける）『実践』からの絶縁性」の主張を見る解釈にも一定の根拠があると言えるだろう。ただし、『ホルテンシウス』の資料にはアリストテレスに由来しえない点もある [藤澤 2000 (1973), 注 24, Hutchinson & Johnson comm. ad. loc.]。とりわけ、いわゆる四元徳の枠組が導入され、その一つとしての「思慮」 (*prudentia* = *φρόνησις*) が実践知の意味で捉えられた上で、観想知にあたる「認識と知識」と区別されているという点がそうである。この程度の改変はキケロが独力でなしえたかもしれないが、この点に関してはキケロに影響を与えた先行者によるアリストテレス解釈が存在したと考えられる。その先行者と考えられるのが、すでに名前を挙げたアスカロンのアンティオコスである。

キケロ『善と悪の究極について』 [以下、永田・兼利・岩崎訳 2000 を一部改変] 5巻で登場人物ピソが紹介する議論は、アンティオコスの倫理学説にもとづいたものと一般に認められているが (cf. Cic. *Fin.* 5.6–8, 75)、その中にアリストテレス『プロトレプティコス』に依拠すると考えられる「至福者の島」への言及が見出される [Tsouni 2012, 138–9]。そこでは、「至福者の島」においては「賢者たちはあらゆる心配から解放され、生活に欠かせない備品や道具類も必要とせず、自然の認識において探究したり学んだりすることに全時間を費やす」、と説いた「古い時代の哲学者たち」（アリストテレスが念頭に置かれていると考えられる）の議論が紹介されている (Cic. *Fin.* 5.53)。注目すべきは、これに続く箇所に見られる議論である。アンティオコス [以下、問題がない限りピソの議論をこう呼ぶ] によると、人間の活動には多くの種類があり、その間には次のような価値の序列があるという。すなわち、第一位は「天空の現象と、自然によって秘密裏に隠されているが理性が突きとめることのできる事柄との考察と認識 (*consideratio cognitioque*)」、第二位は「国家の運営ないしその運営の理論」であり、その次に「思慮と節制と勇気と正義の原理 (*prudens, temperata, fortis, iusta ratio*) やその他の徳と、徳に適合した諸活動」があるとされる (Cic. *Fin.* 5.58)。細かい点はさておき、ここではただ、観想に当たるものが第一位に置かれ、四元徳にもとづく活動が下位に置かれている点にのみ着目したい。これは、上の『ホルテンシウス』の資料に見られた、四元徳の一つとしての「思慮」と観想知との区別と同型の考え方である。さらに四元徳について詳述される箇所では、「諸徳はたいへん密接に結びつけられ、繋がっていて、どれもが他のすべてに関与し、あるものを別のものから分離することができないのであるが、しかし、それぞれが自己に特有の役目をもっている。すなわち、勇気は苦難と危険において (*in laboribus periculisque*)、節制は快樂の放棄において、思慮は善と悪の選択において (*in dilectu bonorum et malorum*)、正義は各人に各人のものを分け与えることにおいて、それぞれ認められるというように。」 (Cic. *Fin.* 5.67) と論じられている。ここでの諸徳の説明が、やはり上で見た『ホルテンシウス』の資料での説明と重なるのは偶然ではないだろう (特に勇気と思慮を比較)。

### 3. 活動としての観想

アンティオコスは、すでに見たように観想と行為に価値の序列を認める一方で、両者を「活動 (*actio*) 」という概念でつないでいる。人間の「活動」の序列を示す先の引用箇所は、「われわれが活動するために (*ad agendum*) 生まれてきたことは明らかである」(Cic. *Fin.* 5.58) との言葉によって導入されていた。この点について Georgia Tsouni は、「*actio* という語は *ἐνέργεια* と *πρᾶξις* の両概念を明確に区別せず包含している」とし、「*θεωρία* を *actio* (しかも最も高次のそれ) として提示することにより、アリストテレス『ニコマコス倫理学』6巻で鋭く引かれた知的活動と他の行為の種類との間のギャップを埋めている」と論じている [Tsouni 2012, 143, 146; cf. McConnell 2014, 123 n.25]。だが、この解釈を(キケロの解釈としてはともかく)ギリシア語で著述していたアンティオコスに帰すのは困難だろう。ここでの *actio* がアリストテレスの概念を受けているとすれば、*θεωρία* を *πρᾶξις* の一種とみなすとは考えにくい以上、*ἐνέργεια* が最有力の候補となる。実際、観想を「活動 (*ἐνέργεια*) 」とみなす見方は、アリストテレスが『プロトレプティコス』で強調している点であった。

この点については、遠回りになるが、D. S. Hutchinson & Monte Ransome Johnson による進行中の『プロトレプティコス』研究に触れておきたい。彼らの成果はいくつかの既発表論文とウェブ上の解説・注釈から見るができるが [Hutchinson & Johnson 2005, 2015, etc.]、Ingemar Düring に代表される先行研究 [Düring 1961, 1969] からの重要な変更点としては、主要資料となるイアンブリコス『プロトレプティコス』の順序を保持する点 [すでに廣川 2011 でも採用]、本著作をひと続きの弁論・講演ではなく複数の人物による対話篇とみなす点などがある。Hutchinson & Johnson は対話者の名を「イソクラテス」「ポントスのヘラクレイデス」「アリストテレス」と推測しており、その根拠は現段階では十分に示されていないが、彼らの推測が正しいとすると、Düring が本著作の末尾としていたイアンブリコス『プロトレプティコス』8章がヘラクレイデスの弁論になるという点は注目に値する。この章は、廣川も「それまでの幸福な生、理知の生を力強くすすめてきた勢いのある声を曇らせるような形で、現世に生きる人間の現実について説き語っている」 [廣川 2011, 223] と記しているように、他と比べて厭世的で悲観的な色調が濃い。例えば「魂は罪の報いを受けており、われわれはある大きな罪の罰を受けるために生きているのだ、という古人の言葉は神の靈感に満ちたものだ。魂が肉体と結合していることは、何かこのようなこと [罰] にきわめて似ているから」(VIII, 47.24–48.3) といったピュタゴラス主義的教説が語られるのも特徴的である (cf. August. *C. Iul.* 4.15.78 = Cic. *Hort.* fr. 95 Müller = 112 Grilli, Boeth. *Consol.* 3.8)。それを受けて、「われわれの生は自然本性的に悲惨で困難なもの」とであるとされ、だがそれにもかかわらずわれわれの内には唯一「知性と知 (*νοῦς καὶ φρόνησις*) 」が尊重に値する神的なものとして存在しており、だからこそ哲学のみが救いになるのだ、と説かれるのである (VIII, 48.9–14)。こうして、Düring ら

が本著作の最後に置こうとしたことも肯ける次の印象的な言葉も語られる [cf. Hutchinson & Johnson 2005, 282–7]。「したがって、われわれは哲学すべきであるか、それとも生きることに別れを告げてこの世から立ち去るべきか、そのいずれかである。それというのも、他の一切は何かまったくとるにたらぬもの、愚かしいものと思われるからだ。」(VIII, 48.18–21)

これは確かに、ピュタゴラス主義に熱心だったとされるアカデメイア派の哲学者であるポントスのヘラクレイデスの弁論とされるのに相応しい言葉ではある。しかもヘラクレイデスは、ピュタゴラスが「哲学者」という言葉を最初に用いたとする逸話を伝えたことでも知られる (D.L. 1.12 = Heraclid. Pont. fr. 84 Schütrumpf, Cic. *Tusc.* 5.8–9 = fr. 85; cf. Iamb. *VP* 58–59)。祭にただ見物だけを目的として来る人が最も自由人らしいように、人生においては事物の本性の観想を目指す哲学者の生が最も望ましい、とピュタゴラスが答えたという有名な逸話である (なお、この祭の喩えは、おそらくアリストテレス『プロトレプティコス』(IX, 53.15–54.5)を通して、アンティオコス (Cic. *Fin.* 5.48)にも受け継がれる)。ここで想起されるのは、納富信留がプラトン『パイドン』の背景にこうしたピュタゴラス主義的哲学観があることを示した上で、その対話の構図に「ソクラテスが体現する『哲学者』が、ピュタゴラス派の哲学に直面する緊張」を見ていた点である [納富 2005, 32]。これと同じ事情が、Hutchinson & Johnson の解釈が正しければ、アリストテレス『プロトレプティコス』にも当てはまることになるだろう。実際、例えば「もし人が、壁や樹木を透して見たあのリュンケウスについて伝えられているようにものを鋭く見ることができたとするなら、人間がいかに劣悪なものから成り立っているかを見てとる以上、その眺めを見るに堪えるものと思うようなことがありえようか」(VIII, 47.12–15)というこの章の議論は、「動物の各々についての探究に対しても、すべてのものに何か自然に適ったうるわしいものが存在すると考えて、嫌悪感をもつことなく向かっていかなければならない」(PA 645a21–23、濱岡訳 2016)と語るアリストテレス自身の自然観と齟齬するように見える [Hutchinson & Johnson comm. ad. loc.]。だが『プロトレプティコス』のアリストテレスの弁論とされる後の箇所では、「自然に即して生じるもの、あるいは生じたものは、いずれにせよすべてうるわしく生じるもの、あるいは生じたものである」とされ、「このことを、人はわれわれの身体のどの部分からでも見てとることができるだろう」と言われるのである (IX, 50.16–20)。

以上の解釈に全面的に従うか否かはさておき、アリストテレスがピュタゴラス主義的哲学観に直面しながらも、それを (Hutchinson & Johnson の言葉を用いれば)「生を肯定する (life-affirming)」方向に転換して受けとめ直した、ということは十分に考えられる。実際、アリストテレス自身の哲学讃歌の頂点をなすのは、観想においてこそ人間は最高度に〈生きている〉のであり、最高度に〈有る〉のだ、という次の議論である。「魂のはたらき (ἐργον) ——唯一のはたらきであれ、最もすぐれたはたらきであれ——は、思考することと推理することである。したがって、正しく思考する人は、よりいっそう生きてい

るということ、最も深く真理に到達する人は最も生きているということ、またこのような人こそ最も正確な知識にもとづいて知をはたらかせる人、観想する人であるということは、いまや誰にとっても単純容易に推論することができる。そして、完全に生きるということは、このような時にこそ、そしてこのような人、すなわち知をはたらかせている人、知ある人にこそ帰せられるべきである。だが、生きるということがすべての生物にとって〈有る〉ということと同義であるとするなら、知ある人は最高度に、しかも最も厳密な意味において〈有る〉こと、そして、その人が現に活動している (*ἐνεργῆ*)、現にすべてのものごとの中で最もよく知られうるものを観想しつつあるとき、そのときこそ、どのようなときにもましてそうである、ということは明らかだ。」 (XI, 58.3-14)

#### 4. エンデュミオンとオデュッセウス

このように観想を人間の最高度の「活動」として捉える見方を、アンティオコスもアリストテレスから引き継いでいる。その一例としてまず、眠り続ける神話上の人物エンデュミオンへの言及を見てみよう。アンティオコスによると、「自分たちがこの上なく快い夢を経験するだろうと思うときでさえ、エンデュミオンの眠りが自分たちに与えられることは望まず、もしそのようなことになったなら、それは死と同様のことであると考えよう」 (Cic. *Fin.* 5.55) とされる。なぜなら、「精神は常に何か活動すること (*aliquid agere*) を欲する」からである。ところで、エンデュミオンへの言及は、アリストテレス『ニコマコス倫理学』10巻でも重要な役割を果たしていた。至福の神々にはただ観想だけが残されるというすでに見た議論には、次の議論が続いている。すなわち、「にもかかわらず、やはり伝統的に人々はみな、神々は生きていて、しかも活動している (*ἐνεργεῖν*) と判断してきたのである。というのも、実際われわれは神々がエンデュミオンのように眠っているとは考えないからである。すると、この生きている神々から、行為することや、さらに製作することまでも取り去るなら、いったい、観想以外の何が残るといふのだろう」 (1178b18-23) という一節であるが、ここで前提にされているのは観想も (こそ) 活動だという点であった。『プロトレプティコス』でも、「可能状態 (*δύναμις*)」にある眠っている人と「活動状態 (*ἐνέργεια*)」にある目覚めている人とが対比され、目覚めている人こそ「真の、そして本来的な意味で生きている、と言われるべきだ」と説かれている (XI, 57.2-3)。

ただしアンティオコスは、単にアリストテレスの議論を焼き直したわけではなく、ヘレニズム哲学の議論の文脈にそれを位置づけ直している。アンティオコスは、精神が活動を欲求していることを示す「自然本性の徴」として、幼児が「鞭打ちで脅されても」じっとしてはられないという事例を挙げる (Cic. *Fin.* 5.55)。このように人間の自然本性を示すものとして幼児や動物の事例を挙げるいわゆる「ゆりかごの議論 (*cradle argument*)」



は、ヘレニズム哲学の各学派が用いたものである。エピクロス派は、幼児や動物が快楽を追求し苦痛を忌避することを根拠として、快楽こそが生の目的であるという彼らの学説を導いたが (Cic. *Fin.* 1.30 etc.)、これに対してストア派は、幼児や動物を動かすのはむしろ自己保存 (自己の自然本性に即した活動) への意欲だと論じた (D.L. 7.85–86) [近藤 2015]。例えばセネカは、裏返しになった亀はじたばたしてどうにか元の自然本性的な体勢に戻ろうとし、幼児は苦痛をかえりみず立ち上がって歩こうとする、という例を挙げている (*Ep.* 121.7–9)。人間は自然本性的に「鞭打ちで脅されても」活動を欲するというアンティオコスの議論の背景には、こうしたストア派の議論があったはずである。幼児がじっとしてられないという上の例は観想よりも行為を連想させるが、別の箇所では「子どもは鞭打ちで脅しても、事物を観想 (観察) し探究することを (*a contemplandis rebus perquirendisque*) やめさせられない」という例が挙げられている (Cic. *Fin.* 5.48)。ここからも、アンティオコスが観想と行為の両方を「活動 (*actio*)」として統合的に捉えようとしていることが見てとれる。

観想の位置づけに関しては、アンティオコスによるストア派に対する批判的応答が次の箇所に見られることを Thomas Bénatouïl が指摘している [Bénatouïl 2009, 11–24]。すなわち、「私が述べてきたような学究 [観想] は心の快楽のために進められるのだと言う人々は、精神というのは何の益も提供されなくとも喜びを得るのであり、たとえそれが不都合を生じさせようとしても知識そのものに喜ぶという事実からして、それらの学究はそれ自体のために追求されるべきものだということになるのを理解してはいない」 (Cic. *Fin.* 5.50) という一節である。ここでのアンティオコスの批判対象は、ストア派のクリュシッポスと考えられる。クリュシッポスは、「哲学者には特に閑暇の生 (*ὁ σχολαστικὸς βίος*) が相応しいと考えている人々は、初めから間違いを犯しているように私には思える。……こうした生は、よく見てみるならば (*ἀν σαφῶς θεωρηθῆ*)、快く生きることには他ならない。なぜこんなことを言うかという、彼らの隠された真意を見落としてはならないからなのだ。何しろ、このことを明瞭に述べている人々は大勢いるが、もっと不明確に述べている人々も決して少なくはないのだから」 (Plu. *De Stoicorum repugnantibus* 1033C–D = *SVF* III.702) [戸塚訳 1997 を一部改変] と論じたと伝えられているからである。クリュシッポスの批判対象については諸説あるが、アリストテレスが含まれている可能性は高い (Bénatouïl は、上の資料中の「明瞭に述べている人々」をアリストテレスなど、「もっと不明確に述べている人々」をプラトン (特に『国家』の洞窟帰還論) とする解釈を提案している [Bénatouïl 2007, 1–6])。

この箇所で興味深いのは、アンティオコスがオデュッセウスを観想する賢者の模範として提示している点である (Cic. *Fin.* 5.49) [Boyancé 1967, 10–1]。というのもオデュッセウスは、ストア派がヘラクレスとともに数少ない賢者の実例として認めていた人物だったからである [Sen. *De Constantia* 2.1, ps.-Plu. *Vit. Hom.* 136, etc.; Brower 2014, 111, Montiglio 2011]。ストア派はオデュッセウスに、不屈の精神で生き抜く「行動する賢者」像を見て

いたと推測される。これに対してアンティオコスが注目するのは、自分の身体をマストに結びつけさせてまでセイレンの声を聴こうとしたオデュッセウスの知識欲である（彼は「声の甘美さ、歌の新奇さや多彩さ」に惹かれたのではなく「学び知りたいという欲求（*discendi cupiditas*）」に突き動かされたのだとする寓意的解釈が施されている）。また、「どんな種類のことであれ、何でも知りたがるというのは単なる物好きの徴にすぎないが、高尚な事柄の観想によって知識欲へと導かれるのは、この上なく立派な人に見られることだと考えるべきだ」とも付け加えられており、これはプラトン『国家』5巻の「見物好き（*φιλοθεάμων*）」と「哲学者（*φιλόσοφος*）」の区別を想起させるが、さらには Tsouni が指摘するように、見物のための遍歴といった古来の *θεωρία* 概念の含意との関連も見るべきかもしれない [Tsouni 2012, 134; cf. Nightingale 2004, 中畑 2010]。いずれにせよアンティオコスは、ストア派に対抗して彼自身もオデュッセウスを援用することで、観想の理想の再称揚を図ったのである<sup>2</sup>。

また、アンティオコスがその際に知的快樂を積極的に再評価している点も、アリストテレスに従う考え方として注目に値する。『プロトレプティコス』を見ると、(Hutchinson & Johnson の解釈によるとヘラクレイデスの弁論部分で)「人々のうちでも最大の富と権力を手にしてはいるが、知を欠き、正気を失ったまま生きるというのであれば、そのような生を選ぶ者はひとりとしていないだろう。たとえ分別を失った者たちの幾人かがしているように、激しさこの上ない快樂に歓喜しながら生きていこうとしても、このことにかわりはない」(VIII 45.6–11; cf. *EN* 1174a1–3)とされているように、人は自然本性的に快樂よりも観想知を求めるという主張も一方ではなされる。だが後の(アリストテレスの弁論部分とされる)箇所では、観想活動においてこそ人間は最高度に〈生きている〉とする先に見た議論の帰結として、「知をはたらかせることと観想することから生じる快樂こそ、唯一の、あるいはすべてにまさる、生きることから生じる快樂でなければならないことは明らか」(XI 59.9–11)とされており、観想活動そのものに固有の快樂があらためて評価されることになる(cf. *EN* 10.5, 10.7)。同じようにアンティオコスも、一方では「天分に恵まれ高い教育を受けた人であればあるほど、本務(*munus*)を行うことを妨げられているなら、たとえとびきりの快樂に耽ることができるとしても、生きていたいとはまったく思わないだろう」(Cic. *Fin.* 5.57)と(「ヘラクレイデス」的かつストア的に)述べる<sup>3</sup>。だが、すでに引いた箇所にあったように、精神が「知識そのものに喜ぶ(*ipsa scientia ... gaudeant*)」ということ、観想活動が「それ自体のために追求されるべき(*propter se*

<sup>2</sup> ちなみにオデュッセウスは、今回のセミナーの小島和男氏の発表で取り上げられたアプレイウス『ソクラテスの神について』の(現存テキストの)終結部でも、哲学のすすめの文脈で賢者・哲学者の鑑として引かれている(176–8)。また、さらに時代を下ったオリュンピオドロス『アルキビアデス註解』でも、「観想的な人」の範例として挙げられることになる(5.9–13)。

<sup>3</sup> Inwood 2014, 65–72 はここでの「本務(*munus*)」を Arist. *EN* 1.7 の *ἔργον* の訳語と解釈するが、このアリストテレス的要素をアンティオコスではなくネアポリスのスタセアスに帰せようとする Inwood の解釈はとらない [近藤 2016]。

expetenda) 」ものであることの証しとして捉えていたのである。

## 5. 観想するとともに行為する

すでに見たように、アンティオコスが観想と行為の両方を「活動」として統合的に捉えようと試みる。さらに、アンティオコスに依拠しているウァロの見解を伝える資料によると、「生の三種類、すなわち、閑暇の生 (*otiosum*)、行為の生 (*actuosum*)、それら二つから混合された生 (*quod ex utroque compositum est*) について、彼ら [古アカデメイアの人々] は第三番目のものがよいと主張した」とされる (August. *C.D.* 19.3.1–2)。これはアリストテレスの立場に従うものと考えられていたのだろう。キケロは「人間は二つの目的、つまりアリストテレスの言葉を借りれば、理解することと行為することを目的として (*ad intellegendum et agendum*)、いわば死すべき神のような存在として生まれてきた」とする当時の見解を伝えている (*Fin.* 2.40; cf. Arist. *EN* 10.8)。これは一見、ストア派の立場と類似している。ストア派の学説を伝える資料によると、彼らは「観想の生、行為の生、理性的生 (*λογικός*)」の三種類の生のうち、第三の「理性的生」を選ぶべきであると説いたが、その理由は「理性的な動物は観想と行為を目的として (*πρὸς θεωρίαν καὶ πράξιν*) 自然によって特別に作られたから」だというものであった (D.L. 7.130 = *SVF* III.687)。だが、両者の説の内実は大きく異なるように思われる。この点を見るために、哲学に適った生き方の種類という同じ主題を扱った資料を比較したい<sup>4</sup>。

ストア派の一資料によると、賢者に相応しい生き方として、「王制による生」(支配者またはその従者)、「政治活動の生」(政治家)、「知に携わる生 (*ἐπιστημονικός*)」(哲学教師)の三種類が挙げられ、その中で最も優先されるのは政治活動の生だとされる (Stob. 2.109.10–110.8 Wachsmuth = *SVF* III.686)。さらに同じ資料は、「知に携わる生」の活動を「ソフィスト活動 (*σοφιστεύειν*)」と呼ぶことをめぐり、ストア派内部で論争が交わされたことを伝えている。おそらくは後代に「ソフィスト」の含意が嫌われて「知に携わる生」という語が代用されるようになったのだろう。上で挙げられている三種類の生は、哲学教師の生を含めていずれも「財獲得法 (*χρηματισμός*)」、すなわち生計を得る

<sup>4</sup> ただし、この点についてストア派を一枚岩と見るのも難しい。パナイティオスは、観想的徳と行為的徳を区別したとされ (D.L. 7.92 = Panaetius 67 Alesse)、これは一般に Cic. *Off.* 1.15–17 = Panaetius 56 Alesse における「知恵と思慮 (*sapientia et prudentia*)」と他の三つの徳との区別に重なる解釈されている [Alesse 1997, comm. ad loc., Gourinat 2014, 284–8]。また、ポセイドニオスは「生の究極目的 (*τέλος*)」を「決して魂の非理性的な部分によって導かれずに、万有の真理と秩序を観想し、可能な限りその統御に協力して生きること」(Clem. Alex. *Strom.* II.xxi.129.1–5 = Posidonius fr. 186 Edelstein & Kidd) と定義したと伝えられ、ここからは観想と行為の関係に関する独自の考察が示唆される [Kidd 1988, 670–4]。以下では、クリュシッポスの説に依拠すると考えられる資料を取り上げる。ペリパトス派についても、ディカイアルコスのようにむしろ行為的生の優位を主張した哲学者も存在し (Cic. *Att.* 2.16.3)、彼の議論はキケロにも大きな影響を与えた [McConnell, 115–60]。

ための生業として考えられているが、報酬を得る限り元来は（プラトンに従えば）「ソフィスト」以外の何ものでもないだろうからである。ストア派は、「教育から財を獲得し、学知を愛する人々から報酬を受け取ることは、一致して認めていた」と言われているように、報酬を得る哲学教師の生き方自体は問題視しなかったのである（むしろ生計のことを顧慮しないかのように嘯いて「閑暇の生」を説くことこそ欺瞞と考えられたのではないか）。こうした考えのもとでは、特権的に哲学にいそむ「観想の生」とそれ以外の「行為の生」という区別はもはや成り立たない [Bénatouil 2007: 6–10]。

だが、ストア派が「観想」と「行為」という二つの概念の区別自体を廃棄しているわけではない点には注意が必要である。むしろ、「有徳の人は為されるべきものごとを観想するとともに行為する (θεωρητικὸς καὶ πρακτικὸς τῶν ποιητέων)」 (D.L. 7.126 = SVF III.295) という学説に示されるように、あらゆる活動に観想と行為の両面が含まれると考えるのである [Bénatouil 2007, 11–3]。この点が明確になるのが、以下のようなストア派の徳論および哲学観においてである。四元徳にまとめられるすべての徳は、共通の「原理（観想対象） (θεωρήματα)」からなる「知 (φρόνησις/ἐπιστήμη)」のもとに統合され、状況に応じた一つの適切な行為を導く [Collette-Dučić 2014]。哲学そのものも、観想と行為の両面を併せ持つものとして考えられている。すなわち、論理学・倫理学・自然学という三分に分けられるのは、厳密に言えば「哲学」そのものではなく「哲学の言説 (λόγος)」 (D.L. 7.39 = SVF II.37) ないし「哲学者の理論（観想対象） (θεωρήματα)」 (Plu. *De Stoicorum repugnantibus* 1035A = SVF II.42) である [Hadot 1979, Ierodiakonou 1993]。さらに、倫理学だけでなく論理学や自然学も「徳」であると論じられているが（論理学は「軽率や無知を取り除く技術」として、倫理学は「自然と合致して生きる」ための前提として、よく生きることに不可欠だから） (Cic. *Fin.* 3.72–73)、これは「観想的学」と「行為的学」を分けるアリストテレスとは異質の考え方だろう。

次にこれと比較するのは、アンティオコス自身ではないものの、彼と類似したペリパトス派の立場をとっていると考えられる資料——一般にアレイオス・ディデュモス著とされてきたペリパトス派の倫理学説誌（いわゆる *Doxography C*）——の次の箇所である [Moraux 1973, 403–5, 415–6, Sharples 2010, 111–33, Tsouni 2012, 148–9]。「優れた人は徳を伴った生を選ぶだろう——時宜に導かれて指導的地位につくにせよ、王に仕えたり立法したりそれ以外の仕方で政治活動するにせよ。これらに関わらない場合は、民衆的 (δημοτικόν) な生活形態 (σχῆμα διαγωγῆς) か観想的な生活形態、または中間の教育的な生活形態に向かうだろう。実際、うるわしいものごとを行為するとともに観想すること (καὶ πράττειν καὶ θεωρεῖν τὰ καλά) を選ぶだろう。双方が時宜によって妨げられたならば、片方だけに携わるだろう。すなわち、観想の生を尊重する一方で、共同性のゆえに政治的行為にも向かうのである」 (Stob. 2.143.24–144.8)。圧縮された論述ではあるが、ここでは、ストア派とは違って観想が「生活形態」の一つとされている点と、「観想の生」と「政治的行為」とが分離しうると考えられている点に注目しておきたい。「うるわしいも

のごとを行為するとともに観想する」と言われているのも、あらゆる活動が行為と観想の両面をもつというストア的な意味ではなく、両者を交互に行うという意味に理解すべきだろう (cf. 同 144.16–21)。

以上の対立に対して、上で引いた藤澤であれば、おそらくストア派の肩をもつと思われる。藤澤が評価したのは言うまでもなく（彼の解釈によると）観想と実践とを一体的なものとして捉えていたプラトンである（ただし『国家』の洞窟帰還論——「至福者の島」での生に喩えられるアイデアの観想から政治活動へと哲学者を連れ戻すには強制が必要とされる——を見る限り、プラトンは観想と実践の一体性とともに両者の間の緊張関係も見ていたと思われるが）。藤澤が別の論文で用いている印象的な表現を借りると「人間は、どのような行為・行動・製作にも、“心をこめる”ことができるはずである」〔藤澤 2000 (1980), 348〕と表されるような観想と実践の一体性の主張を極限まで押し進めたのが、ストア派の立場と言えらるだろう〔近藤 2009〕。こうした考え方は魅力的ではあるものの、一つの危険を伴う。それは、哲学に固有の活動とは何なのかが、結局のところ不明確になりかねないという点である。ストア派内部で哲学研究を軽視するかのよう「反知性主義」(?) 的主張が繰り返し説かれたのも、この点と深く結びついていると考えられる。エピクテトスは、「理論 (θεωρήματα)」をこねくり回すだけの職業的哲学教師を批判する中で、単なる「理論」好きは哲学者を自称してはならない、と説く (Diss. 3.21.23)。さらには、「公職や富への欲望だけでなく、平静や閑暇 (σχολή) や旅行や学識 (φιλολογία) への欲望も、人を卑しくする」 (Diss. 4.4.1) とすら述べた上で、すでに見た祭の喩えに捻りを加え、いかに騒々しくても祭の見物は楽しめるのと同様に、どれほど「騒々しい」状況に置かれようともそれに応じた適切な生き方を実践せよ——見物人というよりもむしろ競技者となって「哲学」そのものを各々の持ち場で実践せよ——と説くのである (Diss. 4.4.24–31) [Bénatouil 2013, 164–8]。

これに対してアンティオコスのような立場は、哲学に固有の活動としての探究や研究をあらためて評価するものとなるだろう。こうした観点から見ると、アンティオコスの議論を伝えるキケロの文章には、観想にあたるものの性格づけにあたって、アリストテレス以上にその探究としての側面が強調されていることに気づく<sup>5</sup>。「至福者の島」で賢者たちは「自然の認識において探究したり学んだりすることに (*inquirendo ac discendo in naturae cognitione*) 全時間を費やす」 (Cic. *Fin.* 5.53) と言われていたが、他の箇所でも「古人によって発見された事物に対する感嘆と新しい事物の探究 (*investigatio*) とを決してやめな

<sup>5</sup> ただしアリストテレス自身の「観想」概念も、探究を含む多面的な知的活動一般として解釈することは可能だろう [Roochnik 2009, Roochnik 2013, 178–87]。また、「哲学すべきでない（と主張する）としても（結局）哲学すべき（ことになる）」という、『プロトレプティコス』 (Alex. *Aphr. in Top.* 149.9–15, Clem. Alex. *Strom.* 6.18.162, Elias *in Porph. Isag.* 3.12–23, etc.) の中で論じられ、キケロ『ホルテンシウス』 (Lact. *Div. Inst.* 3.16.9 = Cic. *Hort.* fr. 12 Müller = 54 Grilli) でも用いられた議論には、哲学とは探究や議論の営みだとする前提があると解釈される [Castagnoli 2010, 187–96]。

い」(Cic. *Fin.* 5.57) といった表現がなされている。こうした探究の側面の強調が、アンティオコス自身に由来するのかキケロの表現の仕方によるのか、あるいはより以前の何らかの伝統に遡るのかは定かではない。いずれにせよこの点は、キケロが『ホルテンシウス』において「自分の力の及ぶ限り、哲学の研究 (*studium*) に向かうよう勧めた」(Cic. *Div.* 2.1) 際にも、強調した点であったと考えられる。キケロはこの著作の中で、「真理を探究する (*investigare*) 者は、たとえ真理の発見にまで至り得ないとしても、幸福である」(August. *C. Acad.* 1.3.7 = Cic. *Hort.* fr. 101 Müller = 107 Grilli) と論じたと伝えられているからである。

アカデメイア派懐疑主義の立場をとるキケロには、廣川も指摘しているように、真理の観想自体ではなく、それを目指す探究の過程を重視する理由があった〔廣川 2016, 91-3, 197〕。キケロがこうした立場をとったのは、(キケロの目から見ると) 学祖の教説に隷属的に帰依しているエピクロス派や、「首尾一貫性」の美名の下に明白に是認しがたいことも論じるように強いられているストア派とは異なり、それこそが「一切の権威に頼らずに聞き手の開かれた自由な判断に任せる」という「ソクラテス以来の伝統」を継承した本当の哲学のあり方だと考えたからだろう (Cic. *Div.* 2.150; cf. *Tusc.* 2.4-5, 5.83, *Acad.* 2.8-9)。キケロは、若者たちをこうした哲学にいざなうべく『ホルテンシウス』以下の哲学的著作を執筆することを、自国ローマの役に立つ一種の政治活動とみなした (*Div.* 2.1-7) [Schofield 2013]<sup>6</sup>。その背景には、政治の場から退くことを強いられた状況下で、なおも何らかの仕方で政治に関わろうとするキケロの痛切な思いがあることは間違いないが (*Acad.* 1.11)、自由な探究としての哲学の営みこそが将来を担う若者たちがもつべき徳の涵養に資するということも、真剣に信じていたのだと思われる。またこのことによって、キケロにおいては「哲学のすすめ」と「徳のすすめ」とが——S. R. Slings が論じているように、この両者は元来ソクラテス的な「プロトレプティコス」では重なっていたが、アリストテレスにおいて「哲学のすすめ」へと特化されるに至っていた [Slings 1999, 59-63, 90-3] ——、ソクラテスに回帰することを通して (cf. August. *Trin.* 14.9.26 = Cic. *Hort.* fr. 97 Müller = 115 Grilli)、再び合流するに至ったのである<sup>7</sup>。

<sup>6</sup> なおキケロが自国語のラテン語を豊かにすることを重視していた点も、日本における哲学のあり方を考える上で示唆を与えるだろう (*Fin.* 1.1-10, *ND* 1.7-8, *Tusc.* 1.1-7, *Off.* 1-4)。キケロが事実ラテン語を豊かにしたこと——それを通して西欧の言語を作ることに結果として大きな役割を果たしたこと——は疑いえない [Glucker 2015]。

<sup>7</sup> キケロ晩年の哲学的著作群がラリッサのピロンの枠組 (Stob. 2.39.20-41.25) に依拠しているとする Schofield の解釈が正しければ、ソクラテスへの回帰を通じた「哲学のすすめ」と「徳のすすめ」の再合流にもピロンの影響があると考えられる [Schofield 2002, 96-7]。

【後記】

セミナー当日は、司会の和泉ちえ氏をはじめ多くの方から貴重な質問やコメントをいただいた。本稿中に反映させることができたのは残念ながらその一部にとどまるので、残された課題をセミナー内外の方々と共有すべく、以下では筆者なりに消化した形で紹介しておきたい。

(1) 「プロトレプティコス」というジャンルに関して

- ・ アリストテレス『プロトレプティコス』が（イソクラテスのいわゆる「キュプロス論説」と同じく）王に献呈された著作であったことの意味（納富信留氏のコメントから）
- ・ アンティオコスやキケロの当時における「プロトレプティコス」というジャンルの位置づけ（荻野弘之氏のコメントから）
- ・ アリストテレス『プロトレプティコス』の資料を提供しているイアンブリコスをはじめとした後のプラトン主義哲学への影響、さらにキケロ『ホルテンシウス』を介したアウグスティヌスへの影響（加藤信朗氏のコメントから）

(2) 「観想」概念に関して

- ・ アリストテレス自身における *θεωρία* 概念の微妙さ、特にその探究の側面について（中畑正志氏、今井知正氏のコメントから）
- ・ 「観想」の概念史におけるいわゆる「プラトン主義」の位置づけ（兼利琢也氏のコメントから）
- ・ アリストテレス自身（特に『政治学』）における「観想的生」の位置づけの微妙さと、そのアンティオコスらによる後の受容（瀬口昌久氏のコメントから）

【文献】

Alesse, F., *Panezio di Rodi: Testimonianze*, Napoli, 1997.

Bénatouïl, T., ‘Le débat entre platonisme et stoïcisme sur la vie scolastique : Chrysippe, la Nouvelle Académie et Antiochus’, in Bonazzi, M. & Helmig, C. (eds.), *Platonic Stoicism—Stoic Platonism: The Dialogue between Platonism and Stoicism in Antiquity*, Leuven, 2007, 1–21.

Bénatouïl, T., ‘*Θεωρία* et vie contemplative du stoïcisme au platonisme. Chrysippe, Panétius, Antiochus, Alcinoos’, in Bonazzi, M. & Opsomer, J. (eds.), *The Origins of the Platonic System. Platonisms of the Early Empire and their Philosophical Contexts*, Leuven, 2009, 3–31.

Bénatouïl, T., ‘*Theôria* and *scholê* in Epictetus and Marcus Aurelius: Platonic, Stoic or Socratic?’, in A. G. Long (ed.), *Plato and the Stoics*, Cambridge, 2013, 147–173.

- Boyancé, P., ‘Cicéron et la vie contemplative’, *Latomus* 26, 1967, 3–26.
- Brower, R., *The Stoic Sage: The Early Stoics on Wisdom, Sagehood and Socrates*, Cambridge, 2014.
- Castagnoli, L., *Ancient Self-Refutation: The Logic and History of Self-Refutation Argument from Democritus to Augustine*, Cambridge, 2010.
- Collette-Dučić, B., ‘L’unité des vertus chez Zénon de Citium et son interprétation chrysippéenne’, in B. Collette-Dučić & S. Delcominette (eds.), *Unité et origine des vertus dans la philosophie ancienne*, Bruxelles, 2014, 237–267.
- Düring, I., *Aristotle’s Protrepticus: An Attempt at Reconstruction*, Göteborg, 1961.
- Düring, I., *Der Protreptikos des Aristoteles*, Frankfurt am Main, 1969.
- Fortenbaugh, W. W., *Theophrastus of Eresus, Commentary 6.1: Sources on Ethics* (with contribution on the Arabic material by Dimitri Gutas), Leiden, 2011.
- Fuentes González, P. P., *Les diatribes de Télès*, Paris, 1998.
- Glucker, J., ‘Cicero as translator and Cicero in translation’, *Philologica* 10, 2015, 37–53.
- Gourinat, J.-B., ‘Hétérodoxies stoïciennes sur l’unité des vertus’, in B. Collette-Dučić & S. Delcominette (eds.), *Unité et origine des vertus dans la philosophie ancienne*, Bruxelles, 2014, 269–296.
- Hadot, P., ‘Les divisions des parties de la philosophie dans l’Antiquité’, *Museum Helveticum* 36 (1979), 201–223, rpt. in P. Hadot, *Études de philosophie ancienne*, Paris, 2010<sup>2</sup>, 125–158.
- Hutchinson, D. S. & Johnson, M. R., ‘Authenticating Aristotle’s *Protrepticus*’, *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 29 (2005), 193–294.
- Hutchinson, D. S. & Johnson, M. R., ‘The *Antidosis* of Isocrates and Aristotle’s *Protrepticus*’, 2010 (retrieved July 2016). <http://www.protrepticus.info/antidosisprotrepticus.pdf>
- Hutchinson, D. S. & Johnson, M. R., ‘Protreptic aspects of Aristotle’s *Nicomachean Ethics*’, in R. Polansky (ed.), *The Cambridge Companion to Aristotle’s Nicomachean Ethics*, Cambridge, 2014, 383–409.
- Hutchinson, D. S. & Johnson, M. R., ‘Aristotle: *Protrepticus* or *Exhortation to Philosophy* (citations, fragments, paraphrases, and other evidence) (the version of 2015 January, finalized 2015 January 20)’, 2015 [retrieved July 2016]. <http://www.protrepticus.info/protreprecon2015i20.pdf>
- Hutchinson, D.S. & Johnson, M. R., Iamblichus: *Protrepticus* (chs. 6–12), *De Communi Mathematica Scientia* (chs. 22–23, 26–27), texts, translations, and commentaries [retrieved July 2016]. [referred to as ‘comm.’] <http://www.protrepticus.info/evidence.html>
- Ierodiakonou, K., ‘The Stoic division of philosophy’, *Phronesis* 38 (1993), 57–74.
- Inwood, B., *Ethics After Aristotle*, Cambridge, MA, 2014.
- Kidd, I.G., *Posidonius: Volume II (i and ii). The commentary*, Cambridge, 1988.



- Kondo, T., 'The birth of Stoic freedom from Plato's *Republic*', *Proceedings of the 75 Sections of Contributed Papers of the XXIII World Congress of Philosophy*, forthcoming.
- McConnell, S., *Philosophical Life in Cicero's Letters*, Cambridge, 2014.
- Moraux, P., *Der Aristotelismus bei den Griechen : von Andronikos bis Alexander von Aphrodisias*, Bd. 1 : *Die Renaissance des Aristotelismus im I. Jh. v. Chr.*, Berlin, 1973.
- Montiglio, S., *From Villain to Hero: Odysseus in Ancient Thought*, Ann Arbor, MI, 2011.
- Nightingale, A. W., *Spectacles of Truth in Classical Greek Philosophy: Theoria in its Cultural Context*, Cambridge, 2004.
- Roochnik, D., 'What is *theoria*? *Nicomachean Ethics*, Book 10.7–8', *Classical Philology* 104, 2009, 69–81.
- Roochnik, D., *Retrieving Aristotle in an Age of Crisis*, Albany, NY, 2013.
- Schofield, M., 'Academic therapy: Philo of Larissa and Cicero's project in the *Tusculans*', in Clark, G. & Rajak, T. (eds.), *Philosophy and Power in the Graeco-Roman World: Essays in Honour of Miriam Griffin*, Oxford, 2002, 91–109.
- Schofield, M., 'Writing philosophy', in Steel, C. (ed.), *The Cambridge Companion to Cicero*, Cambridge, 2013, 73–87.
- Sharples, R. W., *Peripatetic Philosophy, 200BC to 200AD: An Introduction and Collection of Sources in Translation*, Cambridge, 2010.
- Slings, S. R., *Plato: Clitophon*, Cambridge, 1999.
- Tsouni, G., 'Antiochus on contemplation and the happy life', in Sedley, D. (ed.), *The Philosophy of Antiochus*, Cambridge, 2012, 131–150.
- Van der Meeren, S., *Exhortation à la philosophie: le dossier grec : Aristote*, Paris, 2011.
- 牛田徳子『アリストテレス哲学の研究——その基礎概念をめぐって』創文社、1991
- 小池澄夫訳『イソクラテス弁論集 2』京都大学学術出版会、2002
- 神崎繁訳「ニコマコス倫理学」内山勝利・神崎繁・中畑正志編『アリストテレス全集 15』岩波書店、2014
- 近藤智彦「「今を生きる」ヘレニズム哲学」『創文』517 (2009), 6–9
- 近藤智彦「ストア派は内面的な幸福を説いたか?」『哲学の探求』（哲学若手研究者フォーラム）42 (2015), 2–23
- 近藤智彦 Inwood 2014 書評『西洋古典学研究』64 (2016), 170–173
- 戸塚七郎訳『プルタルコス モラリア 13』京都大学学術出版会、1997
- 永田康昭・兼利琢也・岩崎務訳『キケロー選集 10：善と悪の究極について』岩波書店、2000
- 中畑正志「「哲学」をめぐる争い：ピロソピアーとは何であったのか」『日本の哲学』11 (2010), 36–56

- 新島龍美訳「大道德学」内山勝利・神崎繁・中畑正志編『アリストテレス全集 16』岩波書店、2016
- 納富信留『哲学者の誕生』ちくま新書、2005
- 納富信留『ソフィストとは誰か?』ちくま学芸文庫、2015（人文書院、2006）
- 濱岡剛「動物の諸部分について」内山勝利・神崎繁・中畑正志編『アリストテレス全集 10』岩波書店、2016
- 廣川洋一『イソクラテスの修辞学校』講談社学術文庫、2005（岩波書店、1984）
- 廣川洋一訳・解説『アリストテレス「哲学のすすめ」』講談社学術文庫、2011
- 廣川洋一『キケロ『ホルテンシウス』断片訳と構成案』岩波書店、2016
- 藤澤令夫「観ること（テオーリアー）と為すこと（プラークシス）——イソクラテス、プラトン、そしてアリストテレスの初期と後期」『藤澤令夫著作集 II』岩波書店、2000、223–252（『西洋古典学研究』21（1973）、1–19）
- 藤澤令夫「現実活動態——アリストテレスにおける〈活動〉の論理と〈運動〉の論理——」『藤澤令夫著作集 II』岩波書店、2000、253–353（『哲学研究』1539（1980）、763–797、1540（1980）、877–936）
- 藤澤令夫「実践と観想——その主題化の歴史と、問題の基本的筋目——」『藤澤令夫著作集 III』岩波書店、2000、35–77（『新岩波講座哲学 第10巻』岩波書店、1985、2–44）